ひろげようこころのネットワーク

1 January 2018 (平成30年)

兵庫県・(公財)兵庫県人権啓発協会
兵庫県マスコット はばタン

ひょうご人権ジャーナル

きずな KIZUNA

特集“地域の安全・安心”

いのちとひとがつながる地域づくり

INDEX

2 巻頭言
人と人、人と地域の絆が創る活力あるふるさと兵庫
井戸 敏三(兵庫県知事)

3 いま、思うこと
宮地 真緒さん(女優)

4 地域の安全・安心
～阪神・淡路大震災の教訓を生かす～
神崎 初美さん(兵庫医療大学看護学部看護学科 教授)

5 つながりが地域の防災・減災への備え
頼政 良太さん(被災地NGO協働センター 代表)

6 一人ひとりができることを
本多 環さん
(福島大学うつくしまふくしま未来支援センターこども支援部門 特任教授)

7 のじぎく文芸賞 詩部門 最優秀賞
「キグルミになりたい」
山内 莉瑚さん(加西市立北条小学校3年生)

8 情報ぷらざ

Photo 播磨町 大中遺跡公園

巻頭言

人と人、人と地域の絆が創る活力あるふるさと兵庫

兵庫県知事
公益財団法人 兵庫県人権啓発協会 会長
井戸敏三

新年明けましておめでとうございます。

今年は兵庫県創設150年の記念すべき年。兵庫の多彩な個性や魅力を見直し、伸ばしながら、新しい兵庫の創造に向けて歩み出す年です。

直近の国勢調査によると、日本の人口がはじめて減少に転じ、兵庫も553万5千人と5年前より5万3千人の減少となりました。一方、東京は、35万6千人増えていますが、この間に人口が大きく増えたのは主として東京圏であって、大阪圏や名古屋圏でも減少しています。しかも、この人口減少は50年以上、100年近く続く大きな課題です。

本県がめざすのは、人口減少、少子高齢化が進もうとも、将来への希望が持てる兵庫づくり。社会全体に閉塞感の広がる先の見えない時代だからこそ、地域は自らの手で確かなビジョンを描き、それぞれの未来を切り拓いていかなければなりません。

今、時代の大きな転換期です。これまでの成長の時代を経て、私たちが忘れてきたものは何だったのか、経済的な価値や合理性ばかりを求め見失ってきたものはいったい何なのか、改めて見つめ直すべきときを迎えています。

あの阪神・淡路大震災を経験した私たちは、人々の絆、地域での助け合い、共に生きることの素晴らしさを学びました。発災直後、ガレキに埋もれた多くの命を救ったのは、声を掛け合い、手を取り合った地域の方々のつながりでした。避難所や仮設住宅などでは、高齢者や子どもたちの見守り、障害者や外国人の方々への支援の輪が広がりました。また、大きな悲しみから心を奮い立たせながら、ともに立ち上がろうとする人々の活力が生まれました。私たちが積み重ねてきた復旧復興の歩みのなかに、これからの成熟社会につなげていくべき大切なものが凝縮されているのではないでしょうか。

昨年一年間を振り返ると、苛酷な長時間労働やハラスメント、高齢者や障害者への虐待、外国人に対するヘイトスピーチなど、人権をめぐる様々な事件が社会問題となりました。SNSや出会い系サイトなどインターネットを通じた、卑劣な犯罪や差別も増加しています。新聞やテレビで見る、こうした事件や犯罪は、決して遠い世界の存在ではありません。本当に豊かな社会とは何なのか。私たちはしっかりと考え、一人ひとりが行動していかなければなりません。

兵庫の新たな飛躍をめざす今、その基盤となるのは、人と人が紡ぐ深い絆です。今こそ、県民みんなの力を合わせ、誰もが支え合っていきいきと暮らす、「活力あるふるさと兵庫」の実現に、ともに取り組んでいきましょう。

本年もどうぞよろしくお願いします。

私たちは、阪神・淡路大震災からの復旧・復興の過程で、生命の尊厳や人と人のつながりの大切さを学びました。自然災害は私たちの生活に大きな被害を与えるだけでなく、被災された人々への差別的扱いなど、人権に関する様々な問題にもつながりかねません。

本号では、他者を思いやり、互いに支え合い、誰もが安心して共に生きる地域づくりについて考えてみましょう。

この人に聞く！

いま、思うこと

女優 宮地（みやじ）真緒（まお）さん

Profile

1984（昭和59）年2月2日生まれ。淡路島出身。NHK連続テレビ小説『まんてん』のヒロインを経て、現在は女優としてドラマ・映画・舞台・バラエティー等で幅広く活動。山口百恵さんの「コスモス」をカバーし、歌手デビューも果たす。舞台『心は孤独なアトム』が2018（平成30）年1月24日（水）から上演、映画『恋のしずく』の公開も控える。aoao（アオアオ）所属。

淡路島出身で女優の宮地さんは、毎年1月17日には欠かさず自身のブログに震災への思いを綴り、防災の準備を呼びかけています。昨年5月には舞台「午前5時47分の時計台」にも出演されました。

阪神・淡路大震災当時のことをどのように記憶していますか

当時は小学5年生で、妹と二人で同じ部屋で寝ていました。地鳴りの音で目が覚めて、体がひゅっと落ちた感じでした。その後の揺れで地震だと気づきました。階下から私たちの名前を叫ぶ母の声と「妹を起こさなきゃ！」と妹の名前を叫んだことを覚えています。

兵庫県の復興をどのように感じていますか

今では、当時の光景が嘘のように、街は復興されたと思いますが、震災前の「暮らし」を取り戻すことを前提とするならば、心の復興はどこまで進んでいるのだろうと、ふと感じることもあります。復興にゴールはないと思っています。

毎年、震災への思いをブログに綴られているのは、どんな気持ちからですか

今、東京に住んでいるのですが、関東では1月17日にさえ、阪神・淡路大震災関連のニュースが少なくなったように感じています。忘れないこと、その日だけは思い出すことで、これからの防災につながっていけばと思い、ブログを書いています。

防災士の資格を取得されたきっかけは

防災士※の資格を取るきっかけは、東日本大震災です。阪神・淡路大震災以降、頭の中で防災シミュレーションを繰り返していたのに、あの日、あの時は体が動かず何もできず、「知識・技術をつけよう」と思いました。防災士は、「自助」「共助」「協働」を原則としています。まず、自分の身を守る。それから地域、周りの防災力を高める。そして支援する。身につけた知識と技能を活かせることが起きないことを願うばかりです。

舞台「午前5時47分の時計台」に出演した時の気持ちは

舞台は、神戸公演だけでなく、東京公演もありました。地元の方に思い出してもらうこと、そして関西から遠く離れた東京の方に知ってもらうことはとても大切なことだと思い、出演しました。初めて台本を読んだ時、当時の光景が蘇（よみがえ）って、少し苦しくなりもしました。

私が今思うことは、「一緒に悲しんでほしい」ではありません。あの震災でたくさんの人が大切な物を失い、傷つき、それでも前を向いて生きているということを知ってほしいのです。また、いつ起こるかわからない災害に、心も身の回りも備えてほしいとも思います。

県民の皆さんへメッセージをお願いします

阪神・淡路大震災を経験した私たちだからこそ、つくることができる安全、発信できる安心を持っていると思います。私も微力ながら、これからも発信し、協力していけたらと思っています。

※社会の様々な場で、防災力を高める活動を行うための十分な意識と一定の知識・技術を修得したことをNPO法人日本防災士機構が認証した人

地域の安全・安心
～阪神・淡路大震災の教訓を生かす～

兵庫医療大学看護学部看護学科
教授
神崎（かんざき） 初美（はつみ） さん

日頃の心がけが大事

阪神・淡路大震災では、地域住民の救助に関して、瓦礫の中から助け出された人々の8割が近隣住民の自助共助によるものだった※ことから、住民の迅速な助け合いと速やかな救助活動の重要性が明らかになっています。しかし、次に災害がまた起きた場合に、この教訓は生かせるでしょうか。それは人々の日頃の心がけ次第といえます。日頃、隣近所の人と挨拶を交わしていますか。時には立ち止まって話をしていますか。日頃から交流があるからこそ、いざという時にもご近所さんの安全を考えるようになるのではないでしょうか。

まちの保健室の活動を通して

私は、「災害看護」領域の実践や研究を行っています。平成23～25年度に「災害支援ナースとまちの保健室ナースの『看護力』で形成する急病や災害に備えられるまちづくりと効果の検証」という研究を行いました。

簡単にいうと、ご近所さんが、心筋梗塞や脳梗塞などすぐに対応しなければならない病になったとき、ご近所さん同士でどのように助け合えるかということについて、私自身や「まちの保健室」の看護師が地域住民の方々に、ミニ講座を開いたり心肺蘇生の実技を共にしたりという啓発活動をしてきました。

実技では、シナリオを作り、地域住民の皆さんが患者役、家族役、ご近所さん役となって真剣そのものの演技をします。見ている人も含め、楽しみながら必要な備えを学んでいくというものです。

いざという時の避難の方法についても、住民の方々と話し合いをしたこともあります。地域の地図を広げて、とりあえずはどこに、どのように逃げるのかについて話し合います。実現性のないことは災害時にはできません。まずはあまり規模を大きくせず100世帯くらいの家々をひとまとまりにして、やる気のあるメンバーで災害時要援護者と呼ばれる方々がどこに住んでいるのかについて地図を用いて話し合いをします。個人情報だからと神経質に縛られる必要はありません。75歳以上の男性か女性か、どのような不自由があるのか程度の情報は、見てもわかります。

そして災害時要援護者の方々が、災害時にどのような支援をしてほしいと思っておられるか本人の意思を聞いてみてください。その上で、どのように逃げるのか、そこにとどまるのかに関する方向性を検討する必要があると思います。逃げる場合は、玄関のげた箱の中にシーツか毛布を入れておき、四隅を持つ人がいたら担架にして逃げることができます。その方は、どの程度の助けが必要なのかもその人の状況に合わせて考えていく必要があります。

まずは、ご近所の人との話し合いから始めてみませんか。

※兵庫県『伝える阪神・淡路大震災の教訓』（ぎょうせい、2009）P.12

Profile

2005（平成17）年3月看護学博士取得（大阪大学）。1987（昭和62）年大阪府急性期総合医療センター（旧大阪府立病院）に入職、ICUCCU、整形外科病棟に勤務し、1997（平成9）年退職。神戸市看護大学助手、兵庫県立大学講師、准教授、教授を経て2014（平成26）年4月から現職。専門は、成人看護学（慢性看護）・災害看護学。

URL http://kanzaki-nursing.jp/

つながりが地域の防災・減災への備え

被災地NGO協働センター代表
頼政良太（よりまさりょうた）さん

被災地NGO協働センターは、阪神・淡路大震災以降の様々な被災地でボランティア活動を行ってきました。特に足湯ボランティアを通して、被災者のお話を聞く、心のケアのような活動に力を入れています。こうした経験を活かして、地域の防災・減災の活動にも取り組んでいます。

日頃から弱い立場の人がより弱い立場に

災害が起きると、通常の社会機能が麻痺してしまい、多くの人が危機的状況に置かれますが、特に日頃から社会的弱者と言われるような人たちがもっとも厳しい状況に置かれてしまいます。

例えば、東日本大震災の被災地では、障害者の死亡率が健常者の死亡率の2倍に上っています※。避難所の環境も障害のある人には適しているとは言えず、女性用の更衣室や授乳室などがない避難所なども多く見受けられました。

このように日頃から弱い立場にある人たちが災害によってさらに弱い立場になってしまうということが、災害時の課題としてあげられます。

日頃からの多様なつながりが災害時のセーフティーネットに

こうした状況を改善するためには、日頃から「つながり」を持つことが大切です。一言につながりと言っても、様々なものがあります。

まずは地域のつながり。自治会や子ども会などのつながりの中で、日頃からどこに誰が住んでいるのかをある程度把握しておけば、早期の避難につながります。

次にテーマごとのつながり。例えば子育てサークルで日頃から防災のことを少しでも考えておけば、いざという時にお互いに助け合うことができます。子育て世代ならではの災害時の悩みに対応するためには、こうしたつながりは大きな助けになります。

最後に、こうしたつながり同士のつながり。いざという時のために、顔を知っている程度でも、より良い避難所の運営や助け合いに役に立ちます。

こうしたつながりは、何も災害のためだけのつながりでなくても構いません。地域の中で多様なつながりが育まれ、様々な人にとって住みやすい地域を作り出すこと、自分が今見えていない立場の人々、弱い立場にいる人たちともつながりを作っていくことが、実は災害時にも強い地域づくりにつながっているのです。

※NHK ETV「福祉ネットワーク」および「ハートネットTV」取材班の調べ（2012（平成24）年9月5日現在）

Profile

1988（昭和63）年広島市生まれ。2007（平成19）年、神戸大学に入学と同時に能登半島地震の被災地で災害ボランティア活動を始める。その後、中越沖地震、佐用町水害、東日本大震災、熊本地震など15以上の国内の災害救援活動に従事。2011（平成23）年4月から被災地NGO協働センタースタッフ。2015（平成27）年5月から代表。神戸女子大学非常勤講師。

ご存じですか？ ハート・プラスマーク

障害者のマークとして、「車いすをモデルにしたもの」が一般的ですが、障害者とは車いすを利用している方だけのことではありません。特に、身体内部（心臓、呼吸機能など）の障害は外見からは分かりにくいため、自宅や学校、職場やスーパーなどで、「辛い、しんどい」と声に出せず我慢している人がいます。日常生活の中で、様々な誤解を受けることもあります。

このマークは、そんな人々の存在を視覚的に示し、理解への第一歩とするために生まれました。

「身体の内部に障害を持つ人がいる」ことを考えるきっかけにしてください。

ホームページ　ハート・プラスマーク　検索

この他にも多くのマークがあります。
詳しくは県ホームページをご覧ください。

ホームページ　障害のある方や配慮が必要な方に関するマーク　検索

一人ひとりができることを

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター
こども支援部門 特任教授
本多（ほんだ）環（たまき）さん

太鼓の音に誘われ、7年ぶりに福島の秋祭りに足を運びました。放射線災害により数年前までは中止となっていたお祭りでしたが、多くの子どもたちが地域の人たちと一緒に山車（だし）を引いたり太鼓をたたいたりしていました。子どもたちの頑張りに心が熱くなりました。

東日本大震災以降、福島の子どもたちは環境の変化を強いられ、嫌な思いや辛い思いをたくさんしてきました。仲のよかった友だちや家族と離ればなれになったり、新たな居場所を見つけるために周りに気を使い、自分の気持ちを後回しにしたり…。

災害発生から6年以上経ち、福島の子どもたちの状況は多様化しています。多くの子どもたちは災害体験を「経験知」に変えながら、新たな目標に向かって力強く歩み続けています。しかし、未だ困り続けている子どもも少なくありません。

「何も悪いことはしていないのに、みんなが私のことを無視したの。だから学校には行けなくなった」と5年間不登校を続けている女の子や「自分がどうしたいのかわからない。もう疲れた」と昨年9月から不登校になった男の子もいます。

子どもたちの話を聞いていると、子どもを取り巻く環境の大切さを痛感します。環境の変化により居場所を失い、自己肯定感を低下させた子どもたちが困り続けているのです。

「うつくしまふくしま未来支援センターこども支援部門」では、被災により課題を抱えた子どもたちを対象に継続性・専門性を生かしながらきめ細やかな課題解決的支援を行っています。被災後、「自己肯定感の向上」や「自立」を課題とする子どもが増加しているため、自分らしさを発揮しながら達成感や有能感を体感することができるような居心地の良い居場所づくりに取り組んでいます。

社会の変化により、子どもたちの居場所が激減しています。塾や習い事等、子どもたちが通う場所は増えましたが、その場所が安心して自分らしさを発揮できる場所であることは少ないようです。子どもたちが様々な体験を通して健やかに成長するためには、安心できる場所とゆったりとした時間が必要です。そこで、挑戦したことや頑張ったことを褒めてくれるような大人と出会うことができれば、子どもは自己肯定感を高め、さらにもう一歩踏みだすことができます。

そのような子どもが育つ地域となるよう、一人の大人としてできることから始めてみませんか？

Profile

大阪府出身。東日本大震災により被災した方々への支援を目的として設立された「うつくしまふくしま未来支援センターこども支援部門」にて子どもや保護者への支援を行っている。震災から6年以上経った今でも、県内外の避難者や帰還した方々から年間300件以上の相談を受けている。不登校や発達障害等、課題を抱える子どもたちに対しては課題解決的支援を行っている。

きずな図書館

発達障害の僕が輝ける場所をみつけられた理由

著者／栗原 類　発行所／株式会社KADOKAWA

NHKのEテレで流暢な英語を話す栗原さん。モデル・タレント・役者として活躍中ですが、自身がADD（注意欠陥障害）であることを公表しています。栗原さんの発達障害は、「記録力が弱い」「感情が表情に出にくい」「人の表情から気持ちを読み取るのが苦手」という特徴があります。

栗原さんは、幼い頃をニューヨークで暮らし、8歳で発達障害と診断されましたが、アメリカの支援体制の整った学校環境と、いつも傍で信じて見守り続けてくれた母親の関わりにより、苦手なコミュニケーションを克服する方法を見つけていきました。

本書の中で、栗原さんは、発達障害の有無にかかわらず、「その人が輝くための場所」を見つけ、あきらめず、その人なりのペースで成長することができれば、誰でも輝く場所を見つけることができると伝えてくれています。

本書は、「できないこと」「苦手なこと」を持っているときに、自分の目標ややりたいことに一歩踏み出すきっかけや勇気を与えてくれる一冊です。

のじぎく文芸賞 詩部門 最優秀賞

キグルミになりたい

加西市立北条小学校3年生
山内（やまうち）莉瑚（りこ）さん

キグルミになりたい
人にわる口を言われても
何も言いかえさず
いつも笑顔

キグルミになりたい
人にたたかれても、けられても
やりかえさず強い体で
いつも笑顔

でもキグルミがひとりになった時
出てくるのは
つかれた心といたかった体
作っていた笑顔

キグルミになりたい？

本当になりたいのは
そんなひとりになったキグルミの
心と体に気がついて
「いたかったね」
「がんばったね」と
声をかけてあげられる人

のじぎく文芸賞 作品集 講評より

人に悪口を言われても、人にたたかれても、いつも笑顔でいる「キグルミ」になりたいと思っていた。「でも」と作者は立ち止まります。「キグルミがひとりになった時」のかなしみや孤独な心をキグルミの身になって想像してみます。そして、詩はここから一気に急展開します。「本当になりたいのはそんなひとりになったキグルミの心と体に気がついて」「声をかけてあげられる人」。人の心は、外から見ていては気づかないところがあります。一歩踏み込んで人の心に寄り添ってみると、見えなかったものが見えてきます、気づかなかったことが多くあることに気づいてきます。

詩の作り方も、起承転結がきちんと考えられていて、人の心に寄り添うことの大切さが心に強く響いてきます。

詩人
のじぎく文芸賞審査委員
時里二郎

※のじぎく文芸賞作品集は、兵庫県人権啓発協会のホームページからご覧いただけます。

きずな映画館

わたしは、幸福（フェリシテ）

© ANDOLFI – GRANIT FILMS – CINEKAP – NEED PRODUCTIONS - KATUH STUDIO - SCHORTCUT FILMS / 2017

監督：アラン・ゴミス
出演：ヴェロ・ツァンダ・ベヤ他
フランス・セネガルなど合作。129分
1月6日からシネ・リーブル神戸で公開
お問合せは、シネ・リーブル神戸
078(334)2126

舞台はコンゴのキンシャサ。バーで歌って暮らしているフェリシテに、息子サモが交通事故にあったとの電話があります。サモは足を骨折していて手術をすれば治るけれども、その治療費は前払いと医者に言われてしまいます。彼女は、元夫に断られ、叔母に借りたり、貸していたお金の強引な回収をしたり、手段を選ばず、手術代のために走り回ります。やっと集めたお金を持って病院に行くと、傷が悪化したとのことでサモの足は切断されてしまっていました。

絶望し、歌えなくなった彼女に、冷蔵庫の修理を請け負っていたタブーが寄り添います。サモの退院の手助けをし、無気力状態のサモをそれとなく励ますのも彼でした。フェリシテは、突然にやってきた事態と全力で戦い、タブーの好意を受け入れることで、やっと自分を取り戻すことができます。

彼女には小さい時に一度死んだと思われたのが棺の中で生き返り、そのときにフェリシテ（幸福）と改名した過去があります。厳しい現実のなか、幸福を求めて必死で生き抜く逞しさと、寄り添う人がいることの大きさを思います。

情報ぷらざ information

平成29年度人権啓発ビデオ『あした 咲く』が完成しました。

「女性が輝く社会」の実現に向けて、これまで様々な取り組みが進められてきました。しかし、現状は、職場や地域における女性の能力発揮のための環境整備や意識改革は必ずしも十分ではなく、また、女性の家事、育児、介護における負担も多い状況にあります。さらに、ドメスティック・バイオレンス（言葉の暴力を含む）やハラスメントなどの女性に対する人権侵害も生じています。これらの問題は、女性が輝いて生きるための大きな障壁となっています。

この作品には、生き方の異なる姉妹が登場します。独身会社員の妹・茜と、専業主婦の姉・翠。それぞれの立場ゆえの悩みや葛藤を抱えています。姉妹での対立や、父との対話、そして、地域の人々とのふれあいを通して、別の視点や価値観に気づきます。

「幸せ」の形は十人十色です。自分で自分の生き方を選択し、女性はもちろん全ての人が「自分の花」をイキイキと咲かせることのできる、多様性尊重社会。その実現をめざすきっかけとなる人権啓発ドラマです。

出演／舞羽 美海、岩佐 真悠子、螢 雪次朗 ほか
企画／兵庫県、（公財）兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会　制作／東映株式会社

字幕副音声付/36分/活用ガイドはＤＶＤに収録

貸し出しについて…（公財）兵庫県人権啓発協会研修部　TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360
購入について……東映株式会社 関西営業推進室　TEL 06（6345）9026　FAX 06（6345）6756

EVENT GUIDE イベントガイド

イベント名　豊岡市　竹野人権学習のつどい
日時　1月20日（土）13:30～15:00
場所　豊岡市役所 竹野庁舎 ※ＪＲ竹野駅から徒歩約３分
内容　演題「当たり前の日常がなくなってわかったこと」
講師 矢崎由美子さん（阪神・淡路大震災語り部）※参加申込必要（先着100名）
問い合わせ　豊岡市地域コミュニティ振興部生涯学習課
TEL0796（23）0341　FAX0796（29）0054

※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

ラジオ関西「谷五郎のこころにきくラジオ」（毎週月曜 10:00～15:00）で、
14:35頃から「きずな」の記事を紹介しています。

HALF TIME

私の住む地域では、春にはレンゲ祭り、夏には納涼祭、秋にはサツマイモ収穫祭、冬にはとんど焼きと、毎年皆が集う行事があり、たくさんの住民が参加しています。世代を超えて交流することで、普段の生活の中でも、「おはよう」「お帰り」と交わす挨拶で安心感が得られる地域です。昔ながらの小さな地域ですが、人と人がつながり、地域を盛り上げていると思っています。

自然災害だけでなく、いろいろな問題に強い地域であるためには、まず「地域を知る」「人を知る」「つながりを作る」ことが大切だと思います。

地域の人の温かい見守りの中で育った私が、今度は地域を盛り上げる担い手になっていかねばならないと感じています。これからも、人権にかかわるタイムリーな話題を取り上げ、読者の皆様とともに、人権文化あふれる社会づくりについて考えていきたいと思います。

本年もよろしくお願い申し上げます。（西村）

「きずな」は、当協会ホームページからもご覧になれます。
兵庫県人権啓発協会　検索

（公財）兵庫県人権啓発協会　〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355　FAX 078（242）5360　info@hyogo-jinken.or.jp

2018（平成30）年1月発行